

〈地元〉を特定する権力  
——成人式における「場所の空間」の固定化——  
The Power Specifying “hometown”  
——Fixing ‘the Space of Place’ in Coming of Age Ceremony——

キーワード：『空間』『場所』『場所の空間』『成人式』

河原 秀行

KAWAHARA, Hideyuki

(東京大学大学院教育学研究科)

## 1. 問題設定

本稿の目的は、場所性が付与される空間を特定することで「場所」を「空間」に従属させようとする、行政権力の政治的実践を描き出すことである。

社会科学において、「空間」と「場所」の対立は長らく問題視されてきた。均質で透明な「空間」化と、それに抗う人々の主観的な意味付与に支えられる「場所」という図式は、もはや改めて強調するまでもない。そしてそこで「空間」化の担い手として矛先にあがってきたものの一つが、行政権力であった。時に資本主義と共謀して、時に官僚制的組織形態の帰結として、行政権力は空間を支配する。そしてその支配を駆動するものがなんであれ、それは場所性を剥奪する (Relph 1976=1999)。これが行政空間と場所の対立の基本的な図式であり、この図式は実証研究においても度々援用されている (堀川 2000, 川田 2005 など)。

ただし、ここで確認しておきたいのは、上述のような行政空間の権力性を指摘する研究は、行政と住民との対立を、人々が空間に見出す「意味」の対立として捉えてきたということだ。また、行政／住民という二項による図式の不十分さを指摘する研究もあるが、それらも往々にして主体を増やし、「意味」の差異を細かく分類することにとどまってきた (野田 1996, 堀川 2010)。こうした一連の研究で不問にされているのは、人々が見出す「意味」——例えば場所性——が付与される空間の範囲である。社会科学において、どこに境界を引くかは常に問題になってきた (Lamont & Molnár 2002)。それは空間についても例外ではない。政治的には、国境線は幾度となく紛争の根本原因となってきたし、学術的にも、例えば移民研究が国内／外という区分を前提としていたことが「方法論的ナショナリズム」と批判されている (大井 2006, 伊豫谷 2007) ように、地域の範囲を設定すること自体が、極めて重要な問題であった。このことを踏まえるならば、空間に付与される「意味」の差異にのみ注目していたのでは、空間化にかかわる権力は部分的にしか評価できない。より直接言うならば、そうした「意味」が付与される空間の範囲を操作する権力を、捉えるこ

とができないのである。こうした関心を「空間」と「場所」を論じるために再定位するならば、主観的意味——場所性——の質を問うだけでなく、それが付与される空間を問う、すなわち「場所の空間」を問うことが要請されているとすることができるだろう<sup>1</sup>。

以上のような問題設定の下、本稿では、場所性を維持した上で、それが付与される範囲を特定することによって場所を手懐ける、行政権力の政治的实践を描き出すことを意図する。このことによって、行政権力による空間化とそれを物語的に消費する一形態を捉えることができるだろう。

## 2. 先行研究の検討と分析の方法・対象

### 2.1 先行研究の検討

ここで、「場所の空間」について言及した先行研究を整理してみたい。そう多くはないが、例えば都市社会学領域では、「鶴見区」という行政単位と、主観的帰属意識の不一致を指摘した高木（2009）、福田（2009）などが挙げられようか。都市ではなく地方について扱ったものとしては、「地元」と思う範囲を直接的に尋ね、その狭さを指摘した轡田（2015, 2017）などが挙げられる。

より直接的に「場所の空間」について論じた研究としては、例えば成田（1998）がある。これは、場所性を内包する空間のメタファー（Smith and Katz 1993）である「故郷」という概念の内実や使われ方について、様々な歴史資料から検討したものである。その結果、「故郷」という概念が曖昧で主観的なもの、想像によって創造されるものであるがゆえに、その範囲に関して揺らぎがあることを明らかにした。同様に、浅野（1999）も「地元」という語の適用範囲が場面によって都合よく使い分けられていることを論じており、これらは場所性を内包する語彙に注目することの有効性を示していると言えよう。その他に、「場所の空間」認識の規程要因について扱ったものとして、高校生の進路選択行動と主観的な距離感覚との関係について論じた中村（2010）などがある。

これらの研究の課題を整理しておこう。そもそもこうした研究の数が少ないこと自体が大きな課題であるが、内容については、第一に、「空間」と「場所」の対立の延長として、「空間の範囲」と「場所の範囲」の対立を描く傾向にあったことである。先に示した高木（2009）や福田（2009）もそうだが、これらの研究は、場所性が付与される空間について言及をしているものの、「(行政)空間」の範囲と「場所の空間」の範囲が一致しないことを指摘するにとどまっているという点で、「空間」と「場所」の対立に関する議論の延長線上にある。本稿が描き出したいのは、「場所性」を維持した上で、その範囲を固定することによって「場所」を「空間」が手懐けるさまであり、上記の研究群とは立場を異にする。

第二に、「場所の空間」の多様性を強調する傾向にあったことである。これは轡田（2015, 2017）や成田（1998）、浅野（1999）などが該当する。もちろん、場所が主観的なものである以上、それが対象とする空間も多様になるのは至極当然のことである。しかし、本稿が

注目したいのは、主観的であるがゆえに多様なはずの「場所の空間」を特定の在り方に統一しようとする「空間」の意図と作用である。すなわち、本稿の前提条件（「場所の空間」の多様性）を示すのが上記の先行研究であり、本稿はその上で営まれる政治的実践を描くものであると言えるだろう。

## 2.2 方法と対象

以上の関心から、本稿では成人式を対象とし、式典運営者・登壇者が何を語り、その際にどのような空間枠組みを用いているのか、という二点を——換言すれば「場所性」とそれが付与される「空間」を——考慮に入れた分析を行う。成人式を対象とするのには二つの理由がある。

第 1 に、成人式は地方自治体が運営する公的な式典であるため、成人式を見ることで、若者に影響を及ぼす程度が大きいだろう、地方自治体の認識を垣間見ることが出来るという点が挙げられる。成人式で祝辞や挨拶を述べる者は、首長や地方議会議員など、各地方において一定程度の影響力を有する「権威」（小針 2015：122）である。彼（女）らの働きかけを見ることは、成人式そのものが有する影響を見ることにとどまらず、地方自治体が若者に何を期待し、政策的意思決定を行っているのかの一端を見ることにもつながるのである。

第 2 に、対象が新成人という、居住地決定において重要な時期の若者であることが挙げられる。地方自治体にとって、人口の流入は大きな問題であるが、地域移動は 18～24 歳ごろの若年者に多い（山口・松山 2015）。よって、居住地が分化する最中の若者に対する地方自治体の働きかけは、流入を促し流出を防ぐような、なんらかの意図が介在するはずである。すなわち、成人式においては、「場所の空間」をめぐる諸主体の営みが、直接的に発露しやすいだろうということである。

## 2.3 データの概要

用いるのは、2016 年に実施された、新潟県 X 市成人式で行った調査データであり、より具体的には、①諸挨拶の文字起こし記録、②各種文字資料、③新成人質問紙調査データの三つである。①諸挨拶の文字起こし記録は、その名の通り、式辞やお祝いの言葉などでの登壇者の語りを録音・文字起こししたものである。②各種文字資料については、出席者全員に配付された資料である『平成 28 年度 X 市成人式』と、受付ロビー付近の掲示物中の文章群である。そして最後の③新成人質問紙調査データは、成人式当日に会場で実施された質問紙調査のデータである。成人式の会場のロビーに質問紙と回収用の箱が置いてあり、各人が各人のタイミングで記入・投函できるようになっていたが、筆者が確認する限りでは受付と同時に記入・投函していた者が多かった。成人式参加者は 446 名、質問紙の回収数は 124 部であった（回収率 27.8%）。

なお、以降の分析では、人々によって語られる「場所の空間」を示す語彙を、筆者が用いている空間から区別するため、〈空間〉のように、括弧を付して表現する。

### 3. 「X」の場所性 — 「時間」「空間」「感情」の共有

#### 3.1 〈X〉の集合性

まず、成人式において、場所性を喚起する呼びかけがなされていること、そしてその付与先が〈X〉であることを確認していきたい。X市という空間において〈地域〉は個別的なものではなく集合的な帰属先として語られる。このことは、式辞や祝辞が全て「皆様」や「皆さん」への挨拶から始まることにも端的に表れているが、これは特定の〈地域〉を語る際にも改めて強調される点である。そしてその特定の〈地域〉とは、下の語りを見れば明らかのように、〈X〉に他ならない。

そして皆さんの、ここに、今回、新成人を迎えた、X生まれの方は595名だということですよ。

(X市長「お祝いの言葉」)

縁あってXに生まれ育った皆様は、Xの宝であり、本日その皆様と共に成人式をお祝いできることは誠に嬉しい限りであります。

(X市議会議長「祝辞」)

新成人の皆様ご成人おめでとうございます。Xの活性化のためには皆様の若い力が大切です。是非力をかしてください。

(掲示物「ご来賓の皆様からのメッセージ」)

皆さんが生まれ育った この「X」

「X」に対する想いを綴っていただけませんか...

これからの「X」をみんなで一緒に考えていきましょう！

ご協力をよろしくお願いいたします。

(掲示物「アンケートへのご協力を！！」)

そして、こうした集合性は、「皆様」といった新成人だけでなく、「私ら」「我々」といったような、挨拶を述べる非新成人を含む。さらには、「家庭や学校」や、「Xで生まれた赤ちゃん」「X出身者」のように、成人式という場にはいない人々さえも含む。

去年、Xで生まれた赤ちゃん、300人ちょっとだけです。皆さんの、20年間、皆さ

ん育ちあがった中で、生まれる赤ちゃんの数が、約半分になってしまったわけです。この流れを、私ら一生懸命頑張って、なんとか止めにやあいけません。

(X 市長「お祝いの言葉」)

これまで、家庭や学校、地域で教えられたことや考え方を基にして、大人、社会人として、さらに学び続け、経験を積み重ねていく、生きる道を切り拓いていく。

(X 市教育委員会委員長「式辞」)

X 出身者でありますから、その辺は胸を張ってですね、社会に、期待に、応えて頂きたい。

(新潟県議会議員 B「祝辞」)

このように、成人式においては、集合的な帰属先として〈X〉が参照されている。

### 3.2 「時間」の共有

こうした〈X〉に場所性を付与する語りは、何によって可能になっているのだろうか。成田(1998)は、「故郷」の構成について、「「歴史」という時間、「山河」という風景＝空間、そして「言語」という感情の共有の認識を拠点」としていることを明らかにした。それを踏まえれば、〈X〉についての語りにおいても、〈X〉が歴史的連続性を伴う形で語られているということが確認できるだろう。

さて、新成人の皆様を、大人として迎え、お祝いするこの成人式は、奈良時代におこった元服に始まる我が国特有の伝統行事で、X 市においても大切にしている行事の一つであります。

(X 市教育委員会委員長「式辞」)

私は毎年、この X の、成人式に出席させて頂いておりますが、

(衆議院議員 A「祝辞」)

皆様が、次の世代を担う若者として、X で生まれ育ったことに誇りをもって、今後の人生をしっかりと歩んでいかれますことを心から祈念いたします

(X 市議会議長)

上記のような語りから、成田の指摘の通り、〈X〉が時間の共有を前提としていることが伺える。

### 3.3 「空間」の共有

では、空間の共有についてはどうだろうか。これもまた、時間の共有と同様に〈X〉において成立している。それは以下のような語りに顕著にみられる。

Xのすごさはどこか。それは、真っ暗闇の中、月明かりと星明かりだけで、地面に自分の影が映るんです、このXは。

(X市長「お祝いの言葉」)

ここでは、「月明かりと星明かりだけで、地面に自分の影が映る」という個人的な風景を〈X〉のものとして記述することによって、Xの全員に共有されるものとして描き出している。

同様の記述方法は他にも見られる。例えば、受付ロビーには数点の写真が展示されていたが、写真はどれもX市内の一部の断片を切り取ったものに過ぎない。にもかかわらず、X市内部の個別的で断片的な風景を、「Xの風景」として提示しているのだ。これは、荒山(1998)が志賀重昂の『日本風景論』に見出した、「具体的にとりあげられる風景が、個別的でローカルな風景であるにもかかわらず、そうした風景が「日本の風景美」を代表するというレトリック」(荒山 1998: 26)と全く同じレトリックだと言っていいだろう。すなわち、個別的で断片的な空間を「Xの風景」として提示することによって、個別的な風景を〈X〉の下に統合しているのである。

### 3.4 「感情」の共有

そして、最も重要なこととして、成田が挙げた三つ目の要素である、「感情」の共有がなされている。それが最も顕著なのは以下の語りだろう。

何が一番言いたいのか。それは、今日の皆さんに、これから、このX、Xに対する、大きな大きな愛を持ち続けて、これから人生を歩んでいただきたい。

(新潟県議会議員A「祝辞」)

ここでは、〈X〉に対して「愛」という主観的愛着——場所性——が付与されている。場所性が、〈X〉という特定の空間を対象とするように語られているのである。

また、より直接的な空間のメタファーを用いての表現もなされている。それは、〈こちら〉〈故郷〉(成田 1998)〈郷土〉〈地元〉(浅野 1999, 鈴木 2006)などといったような、主観的な帰属意識を含む空間表現と並列しての語りであり、ここからも場所性が〈X〉に付与されていることを確認できよう。

**X**、自然も、文化も、芸能も、食も、魅力のある **X** だと思います。こちらに残って、頑張ってくれている皆さんは、これからそんな **X** をどんどんどんどんお尻をたたいて景気づけてほしいと思います。

(**X** 市長「お祝いの言葉」)

こちらに住んでいない人も、お盆には戻って、みんなで、和気あいあいと、話を交わす間柄で今後もいてください。

(**X** 市長「お祝いの言葉」)

新成人の皆様おめでとうございます。**郷土**の誇りを忘れずに今後の皆様のご活躍を期待致します。

(掲示物「ご来賓の皆様からのメッセージ」)

新成人になられ心からお祝い申し上げます。大きな夢に向かって進んでください。そして、**故郷**の次世代を担う大切な戦力になってください。

(掲示物「ご来賓の皆様からのメッセージ」)

生まれ育った**故郷「X」**で社会に貢献し、周りから頼られる存在になります。

(掲示物「成人を迎えての抱負 (part2)」)

教師になる夢を叶えて、また**地元 X**に戻ってきたいです。

(掲示物「成人を迎えての抱負 (part4)」)

特に最後の二つ、「新成人を迎えての抱負」の記述は興味深い。これは、成人式に先立って **X** 市が新成人に送付していた出欠確認のための返送用はがき中の自由記述欄に、新成人が事前に記入したものの一部を、**X** 市が掲示したものである。もちろん、掲示されるまでに **X** 市による選別を経由しているから、ここには「場所の空間」を〈**X**〉に固定する **X** 市の意図を見てとれる。しかし、新成人の認識であるという形式を取ることによって、新成人もそうした「場所の空間」認識を持っているかのように／持つべきであるかのように、提示しているのである。

#### 4. 「場所の空間」をめぐる対立

##### 4.1 地方自治体間での対立

場所性を〈**X**〉に付与する以上、他の空間に対しては場所性の付与が避けられねばならない。それは、行政分類上は **X** 市の上位概念である新潟県という空間に対しても同様である。

向こうで、「どこ出身や？」って聞かれたら、新潟です、ではなく、Xです。胸を張って言ってほしいと思います。

(X市長「お祝いの言葉」)

ここでは明確に場所性を〈新潟〉に付与することが忌避されている。しかし、これと対立する「場所の空間」を提示している者もいる。それは新潟県知事である。

地方創生が時代の大きなテーマとなっている今、私は、新潟県というふるさとを、持続可能な社会を作り上げていくため、全力を注いでまいりたいと考えております。ふるさと、新潟、そして、日本の将来を担う、皆様の御活躍を祈念し、お祝いのメッセージといたします。

(新潟県知事(司会代読)「お祝いのメッセージ」)

ここでは、〈ふるさと〉という主観的な帰属感情を伴う語が、〈新潟県〉、あるいは〈新潟〉という行政空間に付与されている。これはもちろん、発話主体が新潟県知事であることによる。すなわち、新潟県での共同性を喚起する意図からであろう。新潟県知事の立場からすれば、「場所の空間」は、新潟県であるべきなのである。

#### 4.2 地方自治体と新成人の間での対立

ここまで一貫して、地方自治体の側が「場所の空間」の固定化を促すさまを見てきた。最後に、新成人の側が、いかなる「場所の空間」認識を持っているかについて、質問紙調査データから確認したい。以下の表は、「あなたにとって「地元」とはどこですか」という問いに対しての回答の分布である。

表1 「あなたにとって「地元」とはどこですか」回答分布

選択肢	小学校区	中学校区	旧市町村	X	新潟県	その他	合計
度数	3	18	16	55	7	2	101
割合	3.0%	17.8%	15.8%	54.5%	6.9%	2.0%	100.0%

注：X市は、平成になってから市町村合併が行われた。その名残で、日常生活においては、その際の旧市町村名が「地区」という呼び名で使われている。

回答者のうち半数強がXを〈地元〉と見ている。裏を返せば、半数弱がそれ以外の回答を示している。特に〈中学校区〉と〈旧市町村〉が3割強に達することから、X市内部に場所性を見出すものも一定数いることがわかるだろう。X市によって「場所の空間」の固定化がなされても、それを内面化するか否かには、個人間でばらつきがあると言える。

## 5. 結論

以上をまとめると、以下の二点に集約できる。

第一に、X市成人式では、(新潟県知事を除いては)時間・空間・感情の共有を通して構築される場所性を〈X〉という特定の空間に付与させるような語りがなされているということである。これは端的に、地方自治体にとっては、その地方自治体が管轄する行政空間が常に問題であるからと解釈できる。人々の移動を考えてみれば良いだろう。X市にとっては、X市からの転出、X市への転入が問題なのであって、転出した人がどこへ行くのか、転入した人がどこから来るのか、そしてX市内での移動の有無は、たいした問題にはならない。そしてそれとは対比的に、新潟県知事は、場所性を〈新潟〉に付与していた。これも同じことである。新潟県にとっては、新潟県からの転出と新潟県への転入が主要な関心となる。換言すれば、X市から転出しようが、新潟県内での移動であればたいした問題ではない。それゆえに、場所性はXに付与される必要はないのだ。このように成人式では、それぞれの主体が、それぞれの立場から「場所の空間」を固定化する働きかけがなされている。

第二に、そうした働きかけにもかかわらず、新成人は必ずしもそうした「場所の空間」認識を共有してはいなかった。「場所の空間」を固定化する試みがどう受け入れられるかは、個人間で分散があると言えよう。このように考えると、ではどういった者が、どういった「場所の空間」認識を持っているのか、換言すれば誰がどこに場所性を付与しているのか、という問いが不可避免的に生じる。この点については稿を改めて論じる必要があるだろう。

そして加えて、本稿の対象の外ではあるが、本稿が描いた権力がもたらす帰結について、二つの可能性を示唆しておきたい。一つは、「場所の空間」を特定することが、人々の利用可能な機会や資源を制限する可能性である。本稿の例で言えば、「地元」を離れたくないと思っている場合でも、「場所の空間」をXと認識する場合と、新潟県と認識する場合とでは、例えば居住地選択の幅には大きな差異があるだろう。そうした中で「場所の空間」を前者に固定化することは、人々の様々な機会を制限することになりかねない。実証研究においても、狭い空間に対する執着が地位達成を阻害するということが指摘されてきている(石戸谷 2004, 平尾・重松 2006, 中村 2010 など)。「場所の空間」を特定する権力の作用が、人々の行為やその帰結にいかなる影響をもたらすのかは、一考に値するであろう。

もう一つは、「場所の空間」を固定することによる、空間的な階層・資源などの格差の隠蔽機能である。X市において、全労働者に占める第1次産業従事者の割合はおおよそ20%であり、新潟県のそれ(5.8%)とは15ポイント近くの差がある<sup>2</sup>。X市内でも、旧市町村単位で見た場合には大きな格差があり、最大値がおおよそ38%、最小値がおおよそ9%と、30ポイント近くの差がある。しかし、人々の〈地域〉の認識枠組みが都道府県単位であれば市区町村単位の格差は見逃されるし、市区町村単位であればその内部での格差は見逃される。とすれば、「場所の空間」を特定することは、特定されたそれ以下の単位を看過させ、問題化させないように機能しているのではないだろうか。「場所の空間」を特定する権力は、こう

した機能的側面からも捉えられて良い。

いずれにせよ、本稿が示したのは場所性を歪めることなく「場所の空間」を特定することによって空間の支配下に置こうとする、行政権力の政治的实践であった。ある空間がいかに眼差されているか——これは確かに重要な問題であるが、重要なのはそれだけではない。場所性やその質の多様性を認めつつも、その範囲を操作することによって「空間」の支配下に置く、そうした権力の作用にも目が向けられなければならないだろう。さらに言えば、この権力形態は、場所性を歪めないという点において住民との対立が顕在化しにくく、より日常的に／潜在的に人々を支配している可能性がある。先に示唆した二点を含め、「場所の空間」を問題化する研究の蓄積が俟たれる。

---

[注]

<sup>1</sup> 「場所の空間」という語自体は「フローの空間」と対比する形でカステルも用いており（高橋 1993, Castells 2003, 山本 2005 など）、空間の場所性を強調する用法である。一方で本稿が用いている「場所の空間」は、地域社会学会（2000：7）が用いているように、場所の空間性を強調した用法である。なお、本稿における意味での「場所の空間」論は、地域社会学会（2000）が、「これからの課題」として言及している（地域社会学会 2000：7）ものの、その後も蓄積は乏しい。

<sup>2</sup> 平成 27 年国勢調査データより筆者算出（以下同様）。

[文献リスト]

荒山正彦, 1998, 「明治期における気象観測ネットワークの形成 国土空間をつくりあげる技法」

荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ—地理学的想像力の探求』古今書院, pp.14-29.

浅野敏久, 1999, 「地域環境問題における「地元」—中海干拓事業を事例として」『環境社会学研究』5, pp.166-182.

Castells, Manuel, 2003, "Space of Flows, Space of Places: Materials for a Theory of Urbanism in the Information Age" in Graham, Stephen (eds) *The Cybercities Reader*, Routledge, pp.82-93.

地域社会学会, 2000, 『キーワード 地域社会学』ハーベスト社.

福田友子, 2009, 「流入労働者たちの系譜 —沖繩出身者、在日コリアン、日系ラテンアメリカ人の集住地域としての鶴見」玉野和志・浅川達人編, 『東京大都市圏の空間形成とコミュニティ』古今書院, pp.171-194.

平尾元彦・重松政徳, 2006, 「大学生の地元志向と就職意識」『大学教育』3, pp.161-168.

堀川三郎, 2000, 「運河保存と観光開発—小樽における都市の思想」片桐新自編『シリーズ環境社会学 3 歴史的環境の社会学』新曜社, pp.107-131.

堀川三郎, 2010, 「場所と空間の社会学: 都市空間の保存運動は何を意味するのか」『社会学評論』60(4), pp.517-534.

石戸谷繁, 2004, 「ローカリティを生きる 「郡部校」生徒の進路選択」, 古賀正義編著『学校のエスノグラフィー —事例研究から見た高校教育の内側—』嵯峨野書院, pp.93-119.

- 
- 伊豫谷登士翁, 2007, 「方法としての移民 移動から場をとらえる」伊豫谷登士翁編著, 『移動から場所を問う—現代移民研究の課題』有信堂高文社, pp.3-23.
- 川田美紀, 2005, 「震災地における歴史的環境の保全対象」『環境社会学研究』11, pp.229-240.
- 小針誠, 2005, 「「荒れる成人式」考」『同志社女子大学学術研究年報』56, pp.119-127.
- 轡田竜蔵, 2015, 『「広島 20-30 代住民意識調査」報告書 (統計分析編)』マツダ財団.
- 轡田竜蔵, 2017, 『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房.
- Lamont, Michèle & Molnár, Virág, 2002, “The Study of Boundaries in the Social Science” *Annual Review of Sociology*, Vol.28, 167-195.
- 中村高康, 2010, 「都市部高校生の進路選択とローカリズム」中村高康編著『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ—』ミネルヴァ書房, pp.231-252.
- 成田龍一, 1998, 『「故郷」という物語—都市空間の歴史学』吉川弘文館.
- 野田浩資, 1996, 「〈歴史的環境〉というフィールド: 平泉町柳之御所遺跡の保存問題をめぐって」『環境社会学研究』2, pp.21-37.
- 大井由紀, 2006, 「トランスナショナルリズムにおける移民と国家」『社会学評論』57(1), pp.143-156.
- Relph, Edward, 1976, *PLACE AND PLACELESSNESS*, Pion. (=1999, 高野岳彦, 阿部隆, 石山美也子訳『場所の現象学』筑摩書房)
- Smith and Katz, 1993, “Grounding Metaphor: Towards a Spatialized Politics” in M. Keith and S. Pile (eds), *Place and the Politics of Identity*, Routledge, pp67-83.
- 鈴木謙介, 2006, 「〈情報〉が地域をつくる—メディアが拓くコミュニティの可能性」丸田一・國領二郎・公文俊平編著『地域情報化 認識と設計』NTT 出版, pp.88-108.
- 高木竜輔, 2009, 「労働者たちの流入と定着」玉野和志・浅川達人編, 『東京大都市圏の空間形成とコミュニティ』古今書院, pp.157-170.
- 高橋早苗, 1993, 「マニユエル・カステルと「都市的なもの」—「都市の意味」の変容をめぐって—」吉原直樹編著『都市の思想—空間論の再構成にむけて—』青木書店, pp.225-246.
- 山口泰史・松山薫, 2015, 「戦後日本の人口移動と若年移動人口の動向」『東北公益文科大学総合研究論集』第 27 号, pp.91-114.
- 山本健兒, 2005, 「「フローの空間」における「場所の空間」としてのミュンヘンとベルリン」『経済志林』72(4), pp.87-180.